特集

書をとおして
～綴るそれぞれの想い

美しい筆遣いと墨の香り、そして紙の感触。
あらゆるものがデジタル化していく現代でも、書道は私たちに心の安らぎと創造力を与えてくれます。
今回の特集は、書き手の想いをのせた書道の魅力と
7月21日から南溟館で開催する「書家金澤翔子展」に向け、その母である金澤泰子さんからのメッセージを紹介します。

広報まくらざき　2024.7　2

広報まくらざきでは、枕崎愛を育み、広報紙に親しんでもらうことを目的に、毎月、本市の小・中学生、高校生に表紙の題字を書いていただいています。巧拙だけでなく、個性が光る枕崎の子どもたちの渾身の題字を楽しんでいただければ幸いです。

＼今月の題字／

今月の題字　枕崎中学校3年
立石 心響（ここ） さん

書をとおして
～集中力を身につける

書道を始めたきっかけは？

小学3年生のとき、いとこの誘いで習い始めました。

書道をしていてよかったことは？

書くときには、お手本をしっかり見て、全体のバランスに気を付けています。そのおかげか、集中力が身についたことがよかったと思います。

書家 山﨑 松峰（しょうほう）

プロフィール

本名　山﨑耕（たがやす）。1951年誕生。
本市里町出身。枕崎高校卒。
25歳ごろ、東京での騒然とした日々に落ち着けるものを求め、書道を始める。
平成16年、第27回東邦展 特選トップ賞・佐久間太熙（たいき）堂賞をダブル受賞。
平成18年から東邦書院の書道師範、令和３年からつつじ書会の会長を務める。

書をとおして
～ふるさとを想う

令和４年度に南溟館で書作展が開催されましたが、どのような想いで臨まれましたか？

故郷があるからこれまで頑張ってこれました。故郷には感謝しかありません。そんな故郷に何か恩返しがしたい…との思いで故郷での書道展を思いつき、念願かなって南溟館で書作展を開催できました。おかげで大変な反響があり、55年振りに再会した同級生、60年振りに再会した里町の皆さん、また新たな出会いがあるなど、書作展を通じて多くの市民の皆さんと触れ合うことができたことは最大の喜びであり、書を通じて得た私の大事な大事な宝物です。

山﨑さんにとって書道の魅力は？

書の道は実に奥深く、果てしなく深いです。行けども行けども先が見えず、「これでよい」と言うところが見えてきません。実に興味深い。古典の臨書では、中国の歴史的な書の大家が三千年、四千年前に書いたさまざまな書体の美しさに触れ、途轍もない感動を覚えます。これを現代において自分なりにどう表現していくかが、まさに書の魅力と言えるでしょう。さらには、書を通してさまざまな人との出会いがあることも書の魅力です。

＼今月の表紙／

部長 小城 紫衣菜（しいな） さん

主な受賞歴
第76回鹿児島県書道展
毛筆の部　県知事賞受賞
第45回読売学生書展
読売新聞社賞受賞

▲誠意（部長 小城紫衣菜さん）
熱意（部員 濵村美優（みゆ）さん）
創意（部員 久保有咲（ゆさ）さん）
同じ「意」の字にも個性が窺える

顧問
石川　正史 先生

書道部では、個人の研鑽だけでなく、イベント等にも参加しています。部内だけでなく、他団体とも計画・準備に関わり、企画力も身に付けることを期待しています。

枕崎高校書道部
書をとおして
～仲間と出会う

書道部ではどんな活動をしていますか？

部員ごとに異なりますが、出品する公募展等に合わせて、多い時で週4日程練習しています。また、学校行事や地域からの依頼に応じて書道パフォーマンスも行っています。

小城さんにとって書道の魅力は？

同じ字を書いても、それぞれの個性が表れるのが面白いところだと思います。

毎年、鹿児島水産高校書道部と合同で行っている書道パフォーマンスでは、どんなことを感じましたか？

今年は、本番に向けて3回ほど合同練習を行いました。その中でお互いを知り、いいところを活かす方法を模索して、いい作品ができたと思います。

▲枕崎高校・鹿児島水産高校交流会
両校書道部の書道パフォーマンス

▲金澤翔子さん（写真右）と母の泰子さん（写真左）

書家 金澤 翔子

プロフィール

1985年誕生。東京都出身。
5歳から母（金澤泰子）の師事で書を始める。
20歳、銀座書廊で個展。その後、法隆寺、東大寺、薬師寺、延暦寺、中尊寺、建仁寺、熊野大社、厳島神社、三輪明神大神神社、大宰府天満宮、伊勢神宮、春日大社等で個展・奉納揮毫。福岡県立美術館、愛媛県立美術館等で個展、ニューヨーク、チェコ、シンガポール、ドバイ、ロシア等で個展を開催する。
ＮＨＫ大河ドラマ「平清盛」揮毫。国体の開会式や天皇の御製を揮毫。
紺綬褒章受章。
日本福祉大学客員准教授。文部科学省スペシャルサポート大使。
東京２０２０公式アートポスター制作。

書をとおして
～共に生きる

このたびは、枕崎市文化資料センター南溟館で開催される金澤翔子展覧会「共に生きる」に寄せて、母親の金澤泰子よりご挨拶をさせていただきます。

私の娘、翔子は生後すぐにダウン症と診断されました。娘が障害者であることは、当時、私の人生にとって大きな試練であり苦難の連続でもありましたが、親子の絆を育んで母娘二人三脚で今日まで歩んでまいりました。そして今、彼女が筆を握って20年の歳月が経とうとしています。

翔子の純度の高い、純粋で無垢な魂の書は、ご覧いただいた多くの人々が感動してくださります。

約40年前に娘が障害者と診断され、暗闇の中で私たちはさまよいましたが、その中で築いた深い親子の絆が、翔子が書家として立派に自立して社会と共存して生きてゆく力の支えになっているのかもしれません。

地域社会との繋がりを深めながら障害者の自立というテーマに彼女なりの自然な形で向き合い、日々成長を遂げているのだと思います。

今回の展覧会では、金澤翔子の原点とも言える10歳に書いた「涙の般若心経」が公開されます。他にも、翔子の真骨頂とも言える迫力の大屏風作品を中心に見どころが満載の展示構成となっております。

翔子が自らの筆で示した魂の作品の数々を是非お楽しみ頂けましたら幸いです。

多くの皆様にご来場頂けますことを願っております。

最後に、枕崎市の皆様にこの素晴らしい機会を与えていただき、心から感謝申し上げます。

展覧会の成功を心からお祈り申し上げます。

▲「書家 金澤翔子展～共に生きる～」の情報は特設ページをご覧ください。